〔史料紹介〕

女性県会議員・田中花子の自筆ノート

―『人生記録』をよむ―

野﨑　喜代美

はじめに

本稿は、鳥取県初の女性県会議員・田中花子（一九〇一―一九八四）の自筆ノート『人生記録』（全六冊）を翻刻紹介するものである。

田中花子は、県会議員をはじめ、各種婦人会の会長、実業家、教育委員や鳥取家庭裁判所の調停委員を務めるなど鳥取県を代表する人物である。

確かに経歴だけをみると、要職をこなす活動的な姿が想像されるが、晩年は病気がちで六二歳をむかえた昭和三八（一九六三）年からは入退院を繰り返す日々を送っている。この頃から彼女は『病中日記』を書き始め、昭和四五年五月まで書き続けている。今回紹介する『人生記録』は、この『病中日記』と一時期並行して、昭和四四年から書き始められたものである。

『人生記録』はいわゆる回顧録であり、内容の正確性という面において多少の限界をもっている。しかし、県会議事録や新聞記事など当時刊行された出版物では伺い知ることができない、県会や婦人会における彼女の本音が語られるなど貴重な資料であるといえる。

今回は、『人生記録』（全六冊）の中から「初の女性県会議員」と冠されることの多い田中花子の、実際の県会議員生活を紹介することとした。該当箇所は、『人生記録』其二（七六頁）の二六頁分であり、彼女が県会議員に立候補して

当選し、精力的な活動を開始する部分である。

一　田中花子と田中家について

ここでは、『人生記録』其一をもとに、田中家に嫁ぐ前後の様子について紹介しよう。

田中花子は、明治三四（一九〇一）年、鳥取県東伯郡倉吉町（現倉吉市）魚町の商家、桑田岩蔵・勝子の三女として生まれた。

明倫小学校卒業後は、当然高等女学校の入学試験をうけるものと信じて毎朝早くから図書館に通い勉強していたが、受験日の近づいた時本家から異論がでた。本家の娘は高等小学に入れるのに、分家が女学校に入れる事はまかりならぬ、というのである。「これが封建制とは後になってしみ〴〵判った事だけれど…不満のまゝの私は高等小学校に二年、本家の娘と共に通った。そして高等女学校の三年生の入試を受けたのだ」[1]。こうして倉吉実科高等女学校に入学するのだが、利発で負けん気の強い人柄がうかがわれる部分である。女学校でも成績は優秀で、大正六（一九一七）年の卒業式では、卒業生の総代として答辞を読んでいる。卒業後は、当時の女性がそうだったように、お茶や生け花といういわゆる花嫁修業をしている。特にお茶の稽古が好きで、将来はお茶の先生になろうと心に決めていたと記している。そして大正七年、一七歳で気高郡湖山村（現鳥取市湖山町）の田中道夫に嫁いだ。

田中家は湖山村の名望家で、代々村長や県会議員を輩出している。道夫の曾祖父にあたる作五郎は大庄屋や郡長などを、祖父にあたる金貞は戸長や区長のほか島根県併合時代には県会議員（明治一二年）を務めている[2]。父の永治も県会議員（明治三〇年～大正四年、但し三二年～三六年の四年間を除く）で、明治四〇年には議長を務めている[3]。また鳥取電灯会社（現中国電力）の創設者の一人で、第三代社長も務めた[4]。

道夫も、三代続きの県会議員（昭和二年～二二年）となり[5]、湖山村長も務めている（昭和一〇年～二一年）[6]。また、日ノ丸商事株式会社（現日ノ丸運送株式会社）や日ノ丸自動車株式会社の取締役社長を歴任するなど実業家としても活躍している。

田中家の家訓である「家憲[7]」を紹介してみよう。

田中家家憲

一　人ハ須ラク真面目ナル可シ

二　凡ソ業務ハ正経ノモノヲ選ビ之ニ就クベシ苟モ投機ノ業又ハ道徳上賤ムベキ業務ニ従事スベカラズ

三　人ハ畢生奮闘スベキモノナル事ヲ忘ル、勿レ
四　国家的観念ヲ以テ総テノ事業ニ当レヨ
五　奉公至誠ノ赤心ハ寸時モ忘ル可カラズ
六　財ノ許ス限リ公共慈善ノ事業ニ尽セヨ
七　勤倹ハ祖先以来ノ厳訓也宜シク服膺シ其功徳ヲ発揮セヨ
八　深ク子弟ノ教育ニ注意シ忠孝ノ心ヲ涵養スベシ
九　家庭ノ清粛ハ長幼ノ序ヲ厳ニスルニアリ決シテ紊ルコトアル可ラズ
十　同族特ニ兄弟姉妹ハ必ズ相和シテ応援ヲ忘ル、勿レ若シ其レ之ニ反シテ同族相争ハンカ遂ニ全家滅亡ノ基ト知ルベシ慎マザルベカラズ
十一　婚姻ヲ為シ負債ヲ起シ又債務ノ証保ニ就テハ必ズ同族ノ協議ヲ経テ而シテ後実行スベキ事
十二　冠婚葬祭ノ儀式及通常招待等ノ事アルモ勉メテ華美ノ風ヲ避ケ其分ニ随テ之ヲ質素ニ為スベシ

これに関して、田中家をよく知る片岡気録[8]は『鳥取大学と田中家[9]』(昭和四七年九月)の中で次のように述べている。

田中家に対しての湖山町民の信頼は、大荘屋・大地主・村長・県会議といった権力に服従する封建的な思想からもたらされた結果ではなくて、「世のため人のために貢けんする人物になれ」との家憲によって培はれ育くまれた田中家の人達の人柄による信頼であって、人間と人間とのつながりからもたらされた信頼であるので、その信頼度は実に暖か味のある根強いものであった。

田中家が、湖山村にあって、いわゆる名望家であることを窺い知ることのできる資料である。

二　婦人会活動と丸髷演説

当時田中家は手広く養蚕をしており、賀露や湖山から若い娘が多く働きに来ていた。花子もこれを手伝った。また、義父の永治が鳥取電灯会社の社長で、自宅がその出張所になっていたため、花子は主任を任され、結婚生活は忙しいものであった。

花子が婦人会活動に関わりを持つようになったのは、義母ますの影響が大きい。ますが湖山村婦人会の役員を務めていた関係で、自然と参加するようになったのである。田中花子が最初に注目されたのは、昭和三(一九二八)年の気高郡婦人会総会での意見発表であった。発表の依頼を受

けたことを道夫に相談すると、応援の言葉が返ってきた。

「人の世は、芸は身を助けるという言葉があるように、何が自分を助ける事になるかわからぬ。あらゆる事にぶつかって何事も経験しておく事だ。或いはこれがお前を助けるものになるかもしれぬ。」と原稿を見てくれ、激励してくれた。[10]

土蔵で練習を重ねて臨んだ発表は好評で、「総会毎に必ず田中花子の意見発表というのが出るのが習慣のようになって」[11]いった。これが田中花子の「丸髷演説」の始まりである。

昭和五年、中央では市川房枝等によって婦人参政権運動が叫ばれていたが、衆議院で認められた公民権が、貴族院では時期尚早という理由によって否決される事件が起こった。

その直後気高郡婦人総会が開催されて、私は演壇に立った。演題は婦人参政権問題であった。私は政治の理念から家庭生活と政治を論じ、婦人に参政権を与へるべしと結んだ。これは一同に感銘を与へる事おびたゞしかった。その翌日鳥取県婦人会が誕生し、(昭和十一年頃)[12]第一回総会を米子市に開く事になり、各郡から弁論選手を出すべく要請されていた。そこに私の気高郡ニ於ける婦人参政権問題演説だ。会終了後、気高郡婦人会長三橋豊蔵氏、湖山村の三十年間連続校長をつとめた田中久秋氏に私は呼ばれた。[13]

演説の依頼である。花子はすぐに断った。封建時代の嫁の立場の難しさを話したが聞き入れられず、この話を家に持ち帰る。「それはならぬ。何しに米子まで行って大きい声をせねばならぬ。」「米子迄行く必要はない」[14]。義母と道夫の反対があったが、夜中までかかってようやく承諾を得て、演説は行われた。

大丸まげの純日本婦人姿の私の口からあまりにも斬新過ぎる(婦人)参政権問題のとう〳〵とほとばしり出たのに来賓も会員も呆気にとられた様子であった。[15]

前述の通り、当時気高郡婦人会長は男性が務めていた。その後、「世は婦人の力を認識し初め、婦人会長は婦人でという事になり」[16]昭和一五(一九四〇)年、花子は気高郡婦人会長に就任した。当時はまだ婦人会は郡内隅々にまで浸透していなかった。そこで、一二人の役員を六班に分けて、

各班に県下の学識経験者[17]一人を配した三人で、気高郡二六ヶ町村全部落に出向いて婦人会の意義を説き、各村々に婦人会の結成を依頼して廻った。

三　初の女性議員誕生

昭和二〇年一〇月、GHQが出した五大改革指令[18]の選挙権付与による婦人の解放をうけて、一二月に新選挙法が公布され、女性にも参政権が認められた。[19]

花子は、昭和二二（一九四七）年四月三〇日に行われた第一回鳥取県会議員選挙に気高郡選挙区から立候補し（定員四名）、得票数六〇九四票を獲得し、県内トップで当選を果たした。[20]鳥取県初の女性県会議員の誕生は、花子四六歳の時である。

同年七月二日、七月定例鳥取県会において初めての代表質問に立った。

私は立候補いたしました時に、唯一つ公約いたしました。それは声を聴くということでございます。声を聴いて政策を持つというお約束をしたのであります。そこでこの約束を履行する為に、私は気高郡の婦人の声を先ず聴いたのでございます。それも町村単位に聴いては、これは一部の人に限られる虞れが多分にあると思いましたので、各部落の一人々々の意見を纏めて見たのであります。これを元に致しまして婦人の問題を六ッ程茲に捉えて質問させて頂いて、知事さんの施政方針を伺いたいと思います。（以下略）

［『昭和二二年鳥取県会議事速記録』］

『昭和二二年鳥取県会議事速記録』に…「県政開闢以来女性の声」と呼ぶ者あり…と記録される初登壇であった。

次の六項目は、この時の発言内容である。

第一　働く婦人に仕事着が欲しい
第二　結婚改善（簡素化）をして欲しい
第三　母乳のない母親に乳の増配をして欲しい
第四　新制中学の充実
第五　学校看護婦（配置）の問題
第六　婦人（の教養向上）の問題

これは気高郡内の女性がいる全世帯を対象に「県政に対する要望書」というアンケートを実施し、その結果を代表質問の内容としたものである。切実な女性の声を県会に届ける。これが、女性の声の代弁者・田中花子の議員活動の始

まりであった。議員在職中、彼女は保守派の大和クラブに所属していたが、[21]少数党にもかかわらず発言の機会をどんどん与えられた。花子自身、それが「女性であるから」と分析している。[22]

昭和二五年四月、持病の胆石で療養していた夫道夫が五七歳で急逝する。花子四九歳の時である。議員生活三年目が過ぎようとしていた時で、花子は亡き夫の跡を継ぎ、日ノ丸自動車の常勤重役となった。県会議員の任期満了までの一年間、「家では未亡人（と初孫の祖母）外で県会議員。会社重役、県婦人会長、湖山町婦人会長とかねている事になる。そして病を発した」。[23]医師にどれか一つでもやめるよう勧められ、県婦人会長は退くが、県会議員の任期はかろうじて全うすることができた。

四　その他の活動

戦後婦人会活動も活発化し、昭和二二年、県が主導で鳥取県婦人団体協議会が結成され、花子が初代会長となった。当初は理想的な婦人会の誕生と思っていたが、次第に不満の声が上がった。職業婦人と家庭婦人の問題意識の違いからくる不満である。各町村で検討を重ねた結果、ここから分離して、「家庭婦人が相寄って協議研討（検）して家政をよくし、社会を住みよくする事に留意するのが婦人会の重大役割であり、これを根かんとして（根幹）婦人運動をする」[24]ため鳥取県連合婦人会を立ち上げ、花子は初代会長となる。そして「私共には読む書とては書店にもなく、之では身の修養の糧もない。何とか婦人の力で切抜けれないのか？」［『歌文集』『無』原稿下書き］田中花子関係資料］という声に向き合い、昭和二五年五月、鳥取県連合婦人会長として、『鳥取県婦人新聞』[25]を創刊させた。夫道夫が同年四月二一日に亡くなって、翌五月四日の創刊である。

およそ進歩向上ということは、片ときも絶えざる歩みをいうものと承知いたしております。よし牛の歩みのチチ（遅々）としていましょうとも、一時のとどまることなく、求めてやまぬ謙きょな姿こそ、正しい女性のあり方と考えます。

創刊号の中の挨拶文（一部抜粋）であるが、これは花子自身の姿とも重なるものである。さらに、自民党鳥取県連婦人部長、鳥取県各種婦人団体協議会会長などを歴任し、昭和三八年からは、鳥取大学の湖山町への統合移転に関しても鳥取大学統合移転湖山町対策協議会会長として、移転後は鳥取大学協力会会長として尽力している。

その後、婦人教育活動に対する功績ほか、社会教育への貢献が認められ、昭和四八（一九七三）年に勲五等瑞宝章を受章し、昭和五四年には、鳥取市制施行九〇周年記念特別功労賞を受賞した。

そして昭和五九（一九八四）年、八三歳の生涯を閉じるのであった。

【追記】

『人生記録』（全六冊）は、平成一九（二〇〇七）年一月、鳥取県立公文書館に寄贈された「田中花子関係資料」の一点である。同資料は、明治・大正・昭和期の田中家及び義父・田中永治、夫・道夫と花子の三人に関する資料であり、資料総数は四九五点からなる。

これらは、平成一七年一一月七日から一八年一月三〇日まで、当館で企画展「女性議員の誕生―女性初の選挙」を開催した際に一括借用し、その後整理を行ってきたものである。この時の展示を企画・担当したのは、当館の専門員であった谷口啓子氏であり、目録を作成するにあたっては、同氏の資料分類等に拠った。

翻刻にあたり、もとの資料所蔵者である田中武子氏には、貴重な資料類をご寄贈いただくなど多大の協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

【凡例】

一　原文は、文章の区切りが不明瞭なため、翻刻者の判断により、一字下げによる改行を行うとともに句読点及び会話文には「　」を付した。

二　明らかな誤字・脱字が判明する部分については、右横の（　）内に、（〇〇）と記した。

三　繰り返し文字は、ひらがなには（ゝ・ゞ）を、カタカナには（ヽ・ヾ）を付した。

四　原文の空欄部分には波線〰を付した。

五　固有名詞以外の旧字体は、原則新字体に改めた。

六　不適切と思われる表記箇所に□□□を充てた。

〈翻刻文〉

昭和二十一年婦人参政権が与へられ、代議士選挙に鳥取県から産婆の田中たつ氏[26]が立候補され、はじめての婦人を加へた投票に連記投票が施行せられ、田中たつ氏は目出度く初の婦人議員としての栄冠をかち得た。

その翌年地方議員選挙に当り、婦人の立候補が認められて私が推される事になった。当時議員としての資格を考へた時、条件を思った時、私の立場はぴったりだなと私でも思った。道夫は仲々（中々）出ろと云わないし、私も積極的には行

動しなかった。併し町村会長会（町村長会）婦人会等からは矢の催促があり困っていたが、道夫はまだ決めないと口をかんして（緘）いる。

或朝突然道夫は云う。「花子、お前は県会議員に立候補するのだ。それ片岡さんを呼んでこい。早く準備ニかゝらぬとおくれる。」速座（即座）ニ片岡先生は走せ（馳せ）、道夫と懇談の上諸準備は進められた。一切を婦人でやる事。従来の道夫の選挙の線の人々は御世話ニならぬ事。それ迄に片岡先生は気高郡内婦人二百名ニ対して往復葉書を以て意見をきいた。そのアンケートは「現在婦人議員を出す事の賛否」である。ほとんど全部が賛成意見の中に女子青年の中に小山という娘が一人「婦人の学力教養は未だ低い。時期尚早」という意見があった。成るほどその通りだ。併しその為に婦人議員が必要だとも考へうる。そこで大多数の意見も判明。事ム局長は岡崎喜久江、片岡先生は総大将格、中村そう（そを）、太田みき、田蓑千枝、小谷、岸田テル、〰〰常代、横山寅等は□□□組のトップ役員。演説の闘士には、道夫が「花子が「これは」と思う人を頼んで来い」という。私は静修女学校教諭田中かね氏、司法官で鳥取に疎開の為来鳥していられた東まさ先生を御願した。男性を加へぬ固い陣容だった。演説にはこの二人の一人づゝにトップ役員が何人かついてくれた。そして街道でも会場でも必ず質疑応答を実施した。

その頃日産自動車会社の専ムとして湖山ニ住んで入（い）られた（日産自動車工場を湖山ニたてたので）生田氏がよく来られた。アメリカ帰りの新知識のもち主である。「奥さんの選挙には小型自動車が必要だ。これでくまなく飛び歩かねば選挙は出来ぬ」という。道夫は「それはアメリカ流で日本ではまだそこまで行ってはいないよ…」とうそぶいていた。処がいよ〳〵開戦の時にはその通り自動車が必要になり、日産の小型の新車が送られてきた。時のうつりに驚いた。

道夫が私を出馬させる決心がついたのがあまり突然でわけが判らなかった。其中道夫は中村そう（そを）氏等に打明けたそうな。県知事に官選知事の最後の鳥取県知事林敬三氏[27]が、民選に変るので東京ニ帰られる送別会の席上、林知事は「田中君私の餞別に一つほしいものがある。それは君の妻君を県会議員に出してほしい事だ。県政の為に是非頼む」と仰った。同座している米原章三氏[28]等双手を上げて賛成し是非〳〵と云はれ、道夫の最も尊敬している林知事の懇望もだしがたく、道夫の心をゆすり、遂に私の出馬を決心したという由、林氏は私の人生再出発に本当の恩人であると今も感謝を忘れない。

婦人会の各部落の会長を皆運動員として届出で正式に運

動をはじめた。湖山村青年団は男女を問わず協力させてほしいと親切な申出があり、これは喜んで受入れた。男青年は連絡係、女青年(女青年)達は連呼要員。とても大きな役をつとめてくれた。

選挙対勢(体制)は整った。

最高顧問　片岡気録
事ム局長　岡崎喜久枝
遊説部長　東まさ
　　田中かね
責任者　中村そう(そを)
　　佐々木千勢理
　　太田みき
　　田蓑千枝子(千枝)
　　小谷くに
　　岸田テル
　　……常代
運動員　(気高郡)婦人会各部落支部長
連絡員　男子青年団　湖山町
連呼係　女子青年団　湖山

企画は片岡先生により、いとも密に〳〵立てられ、各々部処について懸命に動いた。候補者の私には何の苦も与へず、ひたすら遊説のみに終始させてくれた。日産の小型新車が下され、運転手も決り、朝七時出発、夜は十二時一時ニもなる。私は東先生田中先生と共にかけめぐる。はじめ東先生は仰った。「一中に入学出(し)ている子供が「お母さん街頭演説丈はしないでくれ」と云ったので、田中さんは街頭でやらんでも、皆講堂等会場でやる事になると思う」と云って出かけた。私も街頭でやる勇気も持ち合せていなかった。只、私は公約はしない、声による政策と歌(謡)った。これは皆ニ感動を与へた。故に演説の後何処からも質疑応答の時間をもった。これによって一日〳〵私は身につくものを得たようだ。質問の中なぜ主人は保守党であるのに貴女は無処(所)属で出馬するのか?とか、主人はパーヂ(党)になったのでその後釜に出るのか?とか多かった。教育問題の質疑も多かった。判らぬ問題は、私は判らぬから勉強すると答えた。そしてその夜は何時になっても起きて迎へてくれる道夫について教をうけた。教育問題は翌朝出発までに片岡先生を呼んで教をうけた。そして翌日の備をした。

美穂村に行った時だ。同村三田……氏は仲々(中々)頭のいゝ人だ。はじめ県会議員を希望したけれど候補者が多く、断念して村長に立候補し当選、美穂村長におさまっていた。当時とても元気のいゝ人で革新系と社会から見られていた。夜に入って美穂村に遊説ニ行った処、公民館というのか二階の日本間の広間が会場に当てられた。当村多数来会者が

あったが、婦人は真直に並ぶに反し、男性は角から三角形に並んでいる。婦人のように並ぶよう頼んでも一向ニきかない。その首かい者(首魁者)三田氏は三角の中心柱を背にがんばっている。しかも飲酒している事が歴然としているからには、何かをかまえようとの根タン(魂胆)である事は間違ないとうなづける。何となし此方の(も)緊張する。此方は田中かね、中村そう(そを)等。私が挨拶をはじめるや三田氏は名刺をにらんで発言した。五つほど質問するという。第一、「私の易では田中花子という人は子無しだ。子を生んだこともなければ育てた事もない人が婦人代表と称する事はおこがましいではないか」と言い、続いて第二問第三問第五問まで出した。私はやおら立上った。人々は片唾を呑んだ。「三田さんの易は間違です。私は子供を生みました。そして一年育て、死なせたのです。この子の死んだ時たくさんの悔の手紙を頂いたけれど、その中で今でも忘れ得ぬ言葉が一つある。それは「人の親は子を生み育てる丈では本当の親の味はまだ判らぬ。子を死なせてはじめて完全に親の心がわかるものだ」という言葉でした。私はこの言葉を一生忘れる事が出来ません…。この感情は子を生み子を育て、子を死なせてはじめて味う真の親の心であります」というと万策の拍子(万籟の拍子)が沸いた。すすり泣く声、感歎の声も交った。私はつゝ(ゞ)けた。「其後私は生後一ヶ年の子供を育て、女学校を終へ、一人前の社会人に仕立上げる努力をつゞけているのです。この事実に於て三田氏の易は間違っていることを立証すると云へるでしょう」と結ぶと又してもどよめく拍手に三田氏大に狼狽し、「追加質問」…と出た。私は制した。「待って下さい。三田さんの質問は後四つ残っています。これの答弁を終ってから次の質問を承りましょう」そして第二第三第五まで終り、「さあ追加質問を願います」というと「もういゝです」とおとなしく引下った。男連中は大声で云った。「何だいや、女(オナゴ)に負けるだカイヤー」その通り、これは女性の勝利であった。会を終ってホッとしていると村の人が数人いんぎんに挨拶に来た。三田氏の親戚の人々の由。「貴女ニ対して大失礼な事申上げて相すみません。御許し下さい」との事。私は「何も失礼の事はありません。大方の人々はきっと知られぬ事だったと思う。却って何事もよく皆さんニ判って頂いてよかったですから、何も皆様御心配は入(い)りませんから」と皆様と気持よく懇談して別れた。それ以後は三田氏はとても私ニ厚意的で、一かけらの敵意も見せず、協力的な行動を頂いた事はとても嬉しい事だったと思う。

選挙中婦人はとてもよく働いてくれた。部落に入り遊説をやる時、その部落の会長は皆議長をつとめて挨拶もしてくれた。浄土信宗(真)の強い部落では支部長は私の事を「おや

さま」と表現して挨拶をしてくれて私を感動させたのもあった。遊説に行(行く)と連絡すれば必ず人を集めてくれた。選挙運動中三月の雛節句があった。その日は車で走ると、走る車の中にヒナ様のおいり草もち等山のように積まれた。本当ニ婦人会の人々の誠意と厚意には心からの感謝をさゝげた。青谷の夏泊(夏泊)りの辺だったと思う。道で演説をして下さいと百人ばかりの人々が狭い路上に集った。すぐ前は荒波。波浪高くいくら大声を出しても消えそうだ。無理ニ浪とたゝかい、大こえをはり上げて演説を終った時、私ののどは完全にやられていた。声が出ないようになった。でも声がしんしょうだ。青谷町の個人演説会の時会場では参集者は驚きの声を発した。遊説者は皆女性ばかり、一人の男性も加らないという風変遊説隊(風変わり)なのだ…。最後の日は松保村。自動車は最後ともなれば郡内隈なく最後の挨拶をせねばならぬ。本人の私は松保八ヶ部落を歩行遊説した。夏泊以後益々出にくゝなった声を労わり乍ら八ヶ部落かけめぐり、最後ニ午後七時からはじまる鹿野町の公聴会ニ臨まねばならぬ。その頃日ノ丸自動車（田中道夫社長）は、ハイヤーは無くバス一式の経営であったので、一人を運ぶのに貸切車が迎に来てそれにより鹿野町の公聴会に臨んだ。親戚の森村薬店に寄った。同時に立候補した共産党の〰〰氏も懇意の中(仲)とて来ていた。私の声の出ないのを心配した家人は、それ飴湯それテリアカと大さわぎして私ののどを和げてくれた。お陰で最後の公聴会をどうやら終り、家に帰った時は夜半一時過ぎていた。明日は投票日というのに…。戦中道夫は云った。今日投票ならお前の標(票)は八割は出る。併し最後まで戦って開票の時には五割五分から六割はお前に来る…という。票よみもしないでどうして判るかときくと風の吹方で判るという。経験者のカンである。

最終の日を迎へるようになると男性議員はカン〳〵に激しい戦を展開した。酒ノ津のりよう師村では夜半マイクのかけとおし「お前さん等女あきんどは明日からの命がかゝる。誰のお陰であきないが出来るのか？婦人議員を出してもあきないはもうからぬ」と放送し、「田中を投票するものは買はぬ」とはっきり言渡す。こうして婦人は最後のヨロメキがはじまり投票に迷う。そして開票の結果は六四％という大成績。票数は全県一位という好成績で当選した。

よろこびは道夫の方が大きい。我事のように手ばなしで喜ぶ道夫に私は呆気にとられている。そんなに嬉しいのかナ？私にはそれほど嬉しい事もないのに。「しまった」という淋しさにも捉はれる。家庭外ニ出る家庭的の淋しさが何か後悔に似たものさえ与へる。わびしいものだ。道夫の大よろこびするのが何だかおかしいような。

当選の翌朝から、早々から祝の客が続々つゞく。私はし

とやかな家庭の奥さんになって来客を接待した。湖東中学の高田校長は、私が院長の洋裁学院で挨拶した中に、昨夜まで真黒にやけてモンペイで東奔西走、遊説に獅子(ししゝ)吼し走りまわった婦人が、一夜明けた早朝、しとやかな夫人に戻り奥の間で静かにお客にお茶を立てている。この風景こそ真の日本婦人のかゞみだと称賛した。私はその通りが自分のいつわらぬ心境そのまゝを行動したのに、なぜこれ丈驚歎して称賛されるのか？…と又驚いた。

そして私は県会議員の一人として華々しく社会におどり出たのだ。紅一点、しかも県下最高点当選…。全県下が沸いたのも無理もない。(中略)

其翌日から私の県会議員生活がはじまった。最初にぶつかったのは議長選挙。各派の別々のみにくい争いは耳を掩いたい位。女性の夢とあこがれ、必死ニかち得た公職とはこんなみにくいものか。私は一日〳〵つかれ果てた。どうしてこんな生活の中に飛び込んだのか…。政治って、もっと純真なもの、きれいなものと純情的にあこがれていた夢は、破られた気がした。うんざりつかれ、ぐったり家路につくと、夫道夫は朗ニ迎へてくれた。浮かぬ私の様子にいたわりの優しい目をむけてくれた。私のなやみを詳しく聞いた道夫は、懇切に政治というものを分析し、私ニ説明し、指導もしてくれて、漸(ようよ)う正気を取戻した私は、又新しい元気をもって第二日ニ望んだ。帰宅の時は又前日と同様、さえぬ苦悩をかゝえてぐったりつかれて帰宅すると、道夫は更に又新しい力を与へてくれる。こうして私は県会議員の出発をどうにか人並に出る事が出来たのだ。もし道夫の指導がなかったら？冷汗が背すじを伝う。

私は大和クラブという保守派のグループに所属した。音田氏という人権(人格)識見充分、前県庁の庶務課長（道夫県会議員当時）をやっていた学識経験者で、これを幹事長として、安哲（安東哲次郎）、山根繁巳と道夫時代の人もあり、社会党に一時かぶれていたという豪の者竹中栄もある。後に倉吉市長として有名をはせた早川篤太郎(忠篤)〰〰先生の大島〰〰貴族院議員に一期当選した経験のある深田武夫(武雄)、何時もその頃容易に手ニ入らぬうどんを背負いキャラメルを持って県庁に来て、会議中一言も発言せぬ尾古慶二郎(慶次郎)、とんきょうな浅井さん（私の事を皇后〳〵と云い汽車に(で)帰る時湖山駅で皇后さんさいならーとやって乗客一同を呆気にとらせた男もある(で)）。私の母校倉吉女学校の先生であった大栄町の温厚な〰〰〰〰もある。県政会館を根城ニ楽しい議員生活ははじまった…。(30)

革新組に入っていった三橋誠（白兎）、保木本（青谷）、浜口虎太郎（カロ）、金田秀夫（倉吉）には道夫も驚いた。皆、道夫は選挙に彼等を助けた。自分の妻が立候補してい

るのに花子はいゝから、大丈夫当選するから、三橋を出してくれ、保木本を出してくれと依頼し、カロではどうしても加露から一人出して、賀露の問題の進展を計れときびしく指導して、濱口氏を自ら出馬させたのだ。三橋誠には特に力を入れた。かつては道夫の選挙の時力になった人々をたのんだ。「三橋は将来政治的ニ大物に仕上げたい。きっとなってくれる人だ。助けてやってくれ」と我事のように力を入れた。選挙戦の時も、私等も白兎を車が通る時には「三橋さんの御当選を祈ります」と連呼して田中花子の連呼は中止して通ったものだ。街道演説の時も譲り合った。この人々に叛かれた時同志は云った。「田中君、いくら元気を出して見てもこれぢゃだめだないか…」嘲笑的に投げかける友人のこの声ニ答へて道夫は叫んだ。「時代だよ。それでいゝんだ」一言半句も彼等ニ不服がましい言葉は出さない道夫であった。

革新派の中田吉雄が議長になった。そして革新派が第一党になり、大和クラブは少数派の憂身を四年間つゝけねばならぬ苦悩の県会であった。道夫が在職中常に少数党の苦杯をなめたように、私もそれを受つぐ宿命的なものがあった。でも私はどん〳〵発言の機会を与へられた。それは女性であるからであったと思う。議員の怠マンを制する時議長は「午後は田中女史の発言がありますから」という事を忘れなかったから。

はじめて私が代表質問に登壇した時である。私は立候補した時の公約の通り声の政策を作らねばならぬ。そこで気高郡内全部落当にアンケートを取った。県政に対する希望を書かせた。その返事はうづ高く積まれたが、それを分析し多数の上部から五部を選んで、私の第一回代表質問に作ったのである。はじめの挨拶にそれの諒解を叫んでから質問ニ入ったのだ。(後で大橋議員は何でそんな大きな事が出来るものか、あれはハッタリもいい処と云った。私は実蹟を聞かせた処、女性の綿密さに舌を巻いた。)大かっさいの中に第一質問を終り降壇すると、傍聴席に多数の婦人がつめかけていて成功を喜んでくれた。県の部長課長級も大評判だった。之は婦人会で錬えた言論が役立ったと思う。

傍聴席の婦人と雑談を交えている間一人の中年の男が往き来している。未知の人だ。不思議ニ思い乍ら婦人との会話の終る頃この人は近よった。「私は岩坪で貴女の演説の時必ず傍聴して看視しますと云った男です。今日貴女はあの時の意見通り県ニ迫られた。これ丈の力をもって説得されたなら、きっと実力的ニ業績を現はして下さると信ずる。私は今日、約束通り傍聴に来て満足したから、これから村ニ帰って、この由一同に伝へて皆さんニ安心してもらい、貴女を選んだ事を祝福します」と云ってくれた。こんな喜

びを感じた事はかつて無かった。本当ニ私もうれしい。看視という事をとても恐ろしがった私は、こんな力強さを得たよろこびを、新に更に感じたものだ。その夜の宴会の時、各部長等から称賛の辞を浴びてとても嬉しかった。何と云っても紅一点、保守派も革新派も皆、子供の問題社会問題は皆私ニ持込んでくれる。私は女性の立場で掘起す分野はとても広く、仕事がいのある面白い県会生活が始まったのだ。

何度目かの代表質問を終へて降壇する時衛生部長の前にきた。部長は目に涙さえ浮べて曰く「田中さん有難う。今迄何年こんな嬉しい事はなかった。これ迄の男性の演説には私の部の働場もなかった。今日の質問で私共も真剣ニ働ける場が出来た。本当に嬉しい」と泣かれた。思はぬ出来事に驚いたけれど、男性のみの政治の中ニ片手落の面のあった事は否定出来ぬと、しみ〴〵女性の必要を感じた。

初年の九月(五月当選)補正予算の県会が開かれた。私は婦人の教養費三十万円を要求した。これにはたちまち反きょうが起った。まづ中田議長が反対した。「県の役人が田中の提灯をもつ」という反対だ。おかしくて物も言へない。仲市議員が反対した。「平等ならなぜ婦人教養ヒ丈計上するのか。平等なら男性にも出せ」という。私は抗議した。「仲市さんはインテリに合はぬ事をいう。日本の婦人が参政権をもらったのは諸外国のように婦人自身の涙や血でかち得たのではない。戦争にまけて柵からぼた餅のようにもらったのだ。今婦人はボタ餅はもらったけれどもこれを消化する教養は持っていない。けれど現実にはもちは落ちてしまったのだ。我々婦人は早く之を消化する力を作らねばならぬではないか。男性は早くから社会ニ出て教養は身につけ、とくに参政権はもっている。今急ぐ必要なのは婦人の教養費なのだ」と説明した。仲市君も遂に共鳴してくれた。大橋君も反対とがんばった。しかも之は私と共に教育委員会にぞくし、どうしても同意してもらわねばならぬ議員であった。偶然バスの停留所で出会ひ何かと話し合った。彼は私の三十万円ニ反対の急先鋒であったはず。この人が話している中「私も戦争ニ行っている。母を慕った。本当ニ母親ニ教養を高めてもらう事は必要だ」と私ニ同意の発言をしだした。驚いた私は「それでは貴女は私の予算案ニ賛成して下さるのですか?」とたゝみかけると彼は面目無げに言った。「実は私は貴女と話した事が無く、田中という人は保守反動のゴリ〳〵のオカミサンだとばかり考へていた。今日はじめて会って話して見ると違う事に気がついて、今日迄反対した事がすまなくなった」という。「それではこの問題の委員会の採決をどうします?」とつめると彼は「私は席を外してしまうから賛成多数でまとめて下さい」と良

心的なのに感謝した。一人「あくまで反対してやる」と意気込んだのが仲よしの太田の実たん（太田実太郎）。「みんな田中さんに丸められてしまったから俺があくまで戦うぞ…」と或日代表質問ニ立ち、この時反対してやると宣言した。私は「実たん、そんな見栄を切ると次の選挙は落選よ。落選覚悟で発言しなさい」と応酬した。太田さんが登壇した時、傍聴席は一杯の婦人に埋（埋められ）まれた。驚いた実たんは「田中、ようもやったナー」とうめいた。これは、「ようもあれ丈の僅少な時間ニ之丈の婦人を集めたものだナー」という驚異のうめきであった。私は言った。「どうして神ならぬ私があの短時間ニこれ丈の人を集める事が出来ましょう。この婦人は鳥取旧市津ノ井岩美等各方面の人々が見えているけれど神は常ニ正しき者を助けるのが原理…、判りましたか…」とやったもんだ。ウームとうなった太田君、恐らくこれ丈の婦人の前で反対演説は思う半分も言へなかったと思うが、言ったぞ…とうそぶいた。果せるかな、次回選挙に太田さん見事落選したのは痛快やらお気の毒やら…。一回休んで又復帰し議長もつとめたけれど…。県側は、知事副知事以下皆私ニ厚意的だ。そして追加予算ニ婦人教養費三十万円が議決されたのだ。婦人予算というものが県政ニはっきり出たのはこれをもってコウシ（嚆矢）とする。それ迄は文部省から来た三百円、婦人学級ヒのみで県ヒはついていない状態だった。私は驚いて道夫ニたづねた。「どうして過去の議員さんは婦人の予算を持たなかったですか？」「そういったってカ、アの事が公式ニ言へるカイヤー」これが私の質問ニかへって来た道夫（それ迄の県会議員）の返事だったのは笑止の至り、婦人議員の必要性をしみ（し）しみ感得した一例…。

三十万円を以て県下各校区婦人教養の実施ニ当ると当ニ十万円がどうしても足りない。どうして予算化していくか迷っている私に一職員からさゝやかれた。「進駐軍の力を借りる事ですよ勇敢に…」ハッと気がついた私は、速座（即座）に鳥取県婦人の指導に当っているマーガレット・グロース女史を探した。丁度その日アメリカから三名の女士官を伴って米子に公演会をもっている事が判明[22]。私は時を移さず米子に飛んだ。道夫に依頼して車を出してもらった。日ノ丸バス会社の米子支店長が大きなバスを持って駅に迎へてくれた事は印象的で、直ぐ会場にとびグロース女史と通訳に会い、鳥取県婦人に現在教養を必要とする事のメッセージを書いてもらう事の承諾を得た。喜び勇んで県庁に引返した私は「進駐軍からメッセージが出るんだ」と大きく吹聴した。忽ちこれはメッセージが出たと大きく披露され「あれさんから出たら仕方が無いがナー」と男性議員も賛成。たゞちに二十万円の予算成立。おかげで五十万円の予算を以て

婦人の教養に全力を注いだ。

【注】

（1）『人生記録』其一　鳥取県立公文書館蔵
（2）『鳥取県議会史』別巻
（3）注（2）
（4）『鳥取県史』近代経済篇
（5）注（2）
（6）『市町村三役台帳』鳥取県立公文書館蔵
（7）田中永治により作られた家訓で、田中家の人々の根幹を成すものとして注目に値する。
（8）昭和一二年～三〇年にかけて湖山小学校第七代校長を務める。当時湖山村長であった田中道夫に請われて奉職〔湖山小学校創立百周年記念事業実行委員会『湖山小学校創立百周年記念誌』一九七三年〕。花子の婦人会活動及び県会議員選挙を支える。
（9）鳥取大学の統合移転という観点から見た田中家について書かれたもの。湖山の土地所有者三三〇名の協力がすみやかに得られたことは、対策協議会会長田中花子の個人の人格識見と、田中家への信頼によるものである、と述べている。
鳥取大学統合移転計画は昭和三六年に起こった。それまで鳥取市立川町他に点在していた本部・図書館・学芸学部・農学部を湖山町に移転することが三八年に決まり、四一年に統合移転した〔鳥取県企画室『鳥取大学統合移転誌』一九六七年〕。
（10）注（1）
（11）注（1）
（12）花子の記録には昭和一一年頃とあるが、『鳥取県史』近代社会篇には、昭和六年に県婦人会が設立され、同年開かれた第一回総会に、花子が演説をして満場の喝采を博するとの記述がある。
（13）注（1）
（14）注（1）
（15）注（1）
（16）『人生記録』其二　鳥取県立公文書館蔵
（17）「之はおやぢ（道夫が県会議員）の七光りと私は自覚していたが県下の人材が率先して参加して下さる。村上義幸氏、黒田藤重氏、鶴田憲次氏等々・この成果は大きかった。」〔『人生記録』其二〕村上は鳥取大学教育学部長、黒田は県会議長、鶴田は県教育長となった人物である。
（18）五大改革指令とは「憲法の自由主義化」および婦人参政権の付与、労働組合の結成奨励、教育制度の自由主義的改革、秘密警察などの廃止、経済機構の民主化の五点である〔『詳説日本史』山川出版社、二〇〇六年〕。
（19）これを受けて昭和二一年四月、第二二回衆議院議員総選挙が行われ、議員定数四六六のうち婦人議員は三九名が当選した〔『議会制度百年史』資料編〕。
（20）『鳥取県議会史』下巻
（21）議員党派別内訳は、革新連盟一七名、大和クラブ一三名、社会党七名、無所属三名である〔『鳥取県議会史』下巻〕。
（22）注（16）

(23) 注（16）
(24) 注（16）
(25) 昭和二五年五月四日創刊。週刊。現在は『女性TOTTORI』と改称され、月二回発行されている。
(26) 一八九二―一九八五。米子町（現米子市）生まれ。旧姓高坂。助産師。昭和二一年に行われた第二二回衆議院議員総選挙で初の女性議員となる（～昭和二二年）。海外同胞の早期引き揚げや母子保護などに力を注いだ。
(27) 一九〇七―一九九一。東京都生まれ。昭和二〇年一〇月、内務省大臣官房人事課長から転じて鳥取県知事となる（～昭和二二年二月）〔『鳥取県史』近代政治篇〕。
(28) 一八八三―一九六七。県会議員・同議長・貴族院議員。…事業は、日ノ丸自動車・日本海新聞社・日本海テレビ放送・丸由百貨店（鳥取大丸）をはじめ、運輸・交通・生産関係など二〇数社に及ぶが…政財界に与えた影響は他に比類のないほど大きい〔『鳥取県史』近代総説篇〕。
(29) 公職追放。田中道夫が政治家としてその職にあったのは、昭和二年九月～昭和二二年一月までで、政友会に所属していたが、公職追放令によって辞職した。
(30) 当時大和クラブには山家一太郎、前田玄一、安東哲次郎、山根繁巳、田中花子、海田政治、尾古慶次郎、早川忠篤、音田宗一、田中義知、深田武雄、浅井幹、柳谷保一が所属し、無所属で大島高蔵、沢住辰蔵、竹中栄らがいた〔『鳥取県議会史』下巻〕。
(31) 実際は六つの質問をしている。質問内容は「三　初の女性議員誕生」の項に記載した。
(32) 「鳥取軍政隊では県下婦人の民主化をはかるため中国軍政隊婦人問題担当官マーガレット・グロース女史を招き、県および県婦人団体協議会の後援で二十七日から十一月七日まで県下一円で婦人問題懇話会を開催…」。米子での公演は一一月四日、会場は米子高等女学校とある〔『日本海新聞』昭和二二年一〇月二四日〕。

田中花子略年表

年月	年齢	事項	県内、国内の出来事
明治三四年（一九〇一）二月		東伯郡倉吉町（現倉吉市）魚町に桑田岩蔵・勝子の三女として生まれる	
大正六年三月	一六	東伯郡立倉吉実科高等女学校（現倉吉西高等学校）卒業	
大正七年三月	一七	気高郡湖山村（現鳥取市湖山町）、田中道夫と結婚	原敬内閣成立
〃五月	〃	鳥取電灯会社（現中国電力）湖山出張所主任となる（～昭和一五年）	水害（千代川水系中心に県下東部に被害大）
大正一二年九月	二一	長女貞（さだお）誕生	婦人参政権同盟結成
大正一三年九月	二三	長女貞死去	婦人参政権獲得期成同盟会結成
昭和三年	二七	気高郡婦人会の依頼により初めての演説（丸鬚演説）	
昭和一五年（一九四〇）四月	三九	気高郡婦人会の会長に就任（～昭和二八年）	
昭和一七年	四一	湖山村婦人会の会長に就任（～昭和二九年）	大日本婦人会結成 ミッドウエー海戦
昭和二二年四月	四六	第一回鳥取県県会議員に当選（～昭和二六年）	公職追放令改正
〃七月	〃	鳥取県婦人団体協議会結成、会長就任（～昭和三〇年）	第一回統一地方選挙で西尾愛治知事当選
〃	〃	湖山洋裁学院院長に就任（～昭和三六年）	

昭和二四年	四八	鳥取県連合婦人会を設立、初代会長に就任	
昭和二五年　四月（一九五〇）	四九	夫田中道夫永眠（享年五七歳）	朝鮮戦争始まる
〃　五月	〃	鳥取県婦人新聞創刊	
〃　五月	〃	日ノ丸自動車株式会社常勤取締役に就任（～昭和四五年）	
昭和二七年一一月	五一	湖山村教育委員に就任	鳥取大火
〃	〃	気高郡教育委員協議会副会長に就任（～昭和二八年、鳥取市に合併で会長辞任）	
昭和三〇年	五四	自民党鳥取県連婦人部長就任（～昭和五〇年）	県婦人懇話会発足
昭和三七年	六一	鳥取県各種婦人団体協議会会長に就任（～昭和五三年）	県庁舎落成 石破二朗、知事再選
昭和三八年　六月	六二	入院（～昭和三九年一月）	鳥取大学学芸学部と農学部の統合移転決定
〃　八月	〃	鳥取大学統合移転対策協議会会長に就任（～昭和四一年開校）	
昭和四〇年　三月（一九六五）	六四	鳥取大学建設にあたり文部大臣より感謝状（愛知揆一文部大臣）	
〃	〃	鳥取大学建設にあたり県知事より感謝状（県知事石破二朗）	
〃　一二月	〃	入院（～昭和四一年四月）	
昭和四一年	六五	鳥取大学協力会会長に就任	鳥取大学統合校舎完成

昭和四一年一一月	六五	藍綬褒章を受章	石破二朗知事三選
昭和四三年一一月	六七	入院（～昭和四四年三月か）	
昭和四四年　七月	六八	入院（～昭和四五年一月）	
昭和四五年（一九七〇）	六九	日ノ丸総本社常務取締役に就任（～昭和五二年）	
昭和四八年一一月	七二	勲五等瑞宝章を受章	
昭和五一年　九月	七五	入院	
昭和五四年一〇月	七八	鳥取市制施行九〇周年記念特別功労賞を受賞	
昭和五六年一〇月	八〇	傘寿記念に歌文集『無』を刊行	
〃　一一月	〃	入院	
昭和五七年一一月	八一	歌集『ジャスミンの香り』を刊行	鳥取市議会に三二年ぶりに女性議員誕生
昭和五九年　九月（一九八四）	八三	永眠	

典拠・歌文集『無』、『鳥取県史』近代総説篇、『とっとりの女性史』ほか